

2007年に報告された鹿児島県の魚類に関する新知見

本村浩之¹・櫻井 真²

¹ 〒 890-0065 鹿児島市郡元 1-21-30 鹿児島大学総合研究博物館

² 〒 890-8525 鹿児島市唐湊 4-22-1 鹿児島純心女子短期大学

■ はじめに

2008年3月現在、日本周辺水域から4028種の魚類が報告されている。過去記録された日本産魚類全種を扱った最新の一般向け図鑑は2002年に出版された(Nakabo, 2002)。日本は水産国といわれるだけあり、魚類の研究は大学や博物館、国の研究所などの研究機関をはじめ、各自治体の試験場や学校、水族館、さらには一般個人によって盛んに行われている。そのため、日本産魚類における新知見はかなりのスピードで蓄積されている。例えば、Nakabo (2002)以降、現在までの6年間で165種の魚類が新たに日本から発見された。これらの新知見は国内外の各種学術雑誌や各研究機関の機関紙など様々な出版物によって報告されているため、魚類学を専門としている研究者でさえ新知見を完全にフォローすることは容易ではない。

鹿児島県は県土が南北600kmにおよび、多くの島嶼も有している。さらに、奄美大島と種子島・屋久島の間に位置する有名な渡瀬線を始め、鹿児島県には海産魚類に関して、2つの動物地理学的区分線がある。これら2区分線で分けられる3つの異なる魚類相を有する鹿児島県は、魚類の種多様性が日本ではもっとも高い県といえる。そのため、ダイビングでフィッシュウォッチングをするために県外から訪問する人も多く、ダイビングのガイドを含め、鹿児島県の一般市民の魚類へ

の関心は高い。

本報告では、2007年1月から12月に間に報告された鹿児島県の魚類に関する新知見を一般向けに分かりやすく紹介したい。今後はできるだけ毎年本誌で鹿児島県の魚類研究ハイライトを紹介したいと考えている。なお、以下に紹介する魚類の掲載順番はNelson (2006)に従った。

■ 報告された魚類リスト



図1. スナヤツメ南方型. KAUM-I. 2557. 全長137.4 mm, 鹿児島県出水地方 (写真: 鹿児島大学総合研究博物館撮影・提供)。

スナヤツメ南方型 (図1)

Lethenteron sp.

ヤツメウナギ目ヤツメウナギ科カワヤツメ属

小川 (1937) は鹿児島県出水町産スナヤツメ南方型の標本15個体 (現在標本は紛失) を報告したが、その後鹿児島県からの本種の標本に基づく記録はなかった。松沼ほか (2007) は、最後の報告から70年ぶりに鹿児島県出水地方から得られたスナヤツメ南方型の標本 (アンモシーテス幼生) を報告し、現在でも同地域にスナヤツメ南方型が生息していることを示した。本種は環境省の絶滅危惧II類に指定されている。

アズキウツボ (図2)

Encheilycore kamara Böhlke and Böhlke, 1980

ウナギ目ウツボ科コケウツボ属

奄美大島の水深9mから得られた1標本に基づき、日本初記録として報告された (Shibukawa et al., 2007)。ライン諸島、パラオ、奄美大島の水深0.9-9.0mに生息 (Shibukawa et al., 2007)。

Motomura, H. and M. Sakurai. 2008. The fishes of Kagoshima -2007 research highlights. *Nature of Kagoshima* 34: 25-34.

✉ HM: The Kagoshima University Museum, 1-21-30 Korimoto, Kagoshima 890-0065, Japan (e-mail: motomura@kaum.kagoshima-u.ac.jp); MS: Kagoshima Immaculate Heart College, 4-22-1 Toso, Kagoshima 890-8525, Japan (e-mail: sakurai@juntan.k-junshin.ac.jp)



図2. アズキウツボ. NSMT-P 75543, 全長 201.8 mm, 奄美大島 (写真: 国立科学博物館提供).



図3. キビナゴ. KAUM-I. 1511, 標準体長 98.0 mm, 種子島 (写真: 鹿児島大学総合研究博物館撮影・提供).

キビナゴ (図3)

Spratelloides gracilis (Temminck and Schlegel, 1846)

ニシン目ニシン科キビナゴ属

キビナゴはふつう雌雄異体であるが, 2006年5月30日に南さつま市沖で採集された1個体(標準体長 83.8 mm)が雌雄同体であることが報告された(高橋ほか, 2007). ニシン目魚類で雌雄同体個体が確認されたのは初めてである.



図4. ホソオビヤクシマイワシ. FRLM 28706, 標準体長 86 mm, タイ・リボン島 (写真: 木村清志氏撮影・提供).

ホソオビヤクシマイワシ (図4)

Atherinomorus pinguis (Lacepède, 1803)

トウゴロウイワシ目トウゴロウイワシ科ヤクシマイワシ属

これまで *Atherinomorus pinguis* はヤクシマイワシ *Atherinomorus lacunosus* (Forster, 1801) のジュニアシノニム(新参同物異名)とされていたが,

Kimura et al. (2007) によって両名義種は別種であることが明らかになった. *Atherinomorus pinguis* は有効種として再記載され (Kimura et al., 2007), 新標準名ホソオビヤクシマイワシが提唱された (Kimura et al., 2007; 木村ほか, 2007). ホソオビヤクシマイワシはヤクシマイワシより体側中央の縦帯が細いこと, 体側中央の鱗列数が少ないことなど特徴づけられる. 最大標準体長は 136 mm (Kimura et al., 2007). ホソオビヤクシマイワシはインド・西太平洋域に広く分布し, 日本では分布域がヤクシマイワシと完全に重なる. Kimura et al. (2007) はホソオビヤクシマイワシを鹿児島県からは報告していないが, 彼らは本種の標本を大分・宮崎の両県と沖縄, 台湾から報告していること, 本種が表層遊泳性の生活様式をもっていることなどから, 鹿児島県全域にごく普通に生息していると思われる.



図5. ハオコゼ. KAUM-I. 5417, 標準体長 47.9 mm, 鹿児島湾 (写真: 鹿児島大学総合研究博物館撮影・提供).

ハオコゼ (図5)

Paracentropogon rubripinnis (Temminck and Schlegel, 1843)

カサゴ目ハオコゼ科ハオコゼ属

櫻井 (2007) は, ハオコゼの野外における繁殖習性と分布状況について鹿児島県出水郡東町で潜水観察を行い, 水槽飼育による求愛行動の観察も行った. 野外ではトリプル産卵, 水槽内ではペア産卵が観察されたことなどから, 本種は環境条件によって産卵形態が異なることが示唆された.

コクテンアオハタ (図6)

Epinephelus amblycephalus (Bleeker, 1857)

スズキ目ハタ科マハタ属

コクテンアオハタは, これまで日本には生息し



図 6. コクテンアオハタ. KAUM-I. 821, 標準体長 280.2 mm, 鹿児島県南さつま市笠沙 (写真: 鹿児島大学総合研究博物館撮影・提供).

ないと考えられていたが, Motomura et al. (2007a) は過去の文献と標本を精査し, これまでに 8 個体が日本沿岸から採集されていたことが分かった (最古の標本は 1957 年に高知県で採集). 鹿児島県からは 3 個体 (山川・志布志・笠沙から 1 個体ずつ) が記録されており, その内の後者 2 標本が現存する. Motomura et al. (2007a) は本種の分布特性と生態, および過去の標本から, 本種が日本周辺海域で再生産していないことを示唆した.



図 7. カクシヤツトゲテンジクダイ. NSMT-P 75580, 標準体長 28.9 mm, 奄美大島 (写真: 国立科学博物館提供).

カクシヤツトゲテンジクダイ (図 7)

Neamia articycla Fraser and Allen, 2006

スズキ目テンジクダイ科ヤツトゲテンジクダイ属

本種は鹿児島 (奄美大島) と沖縄から得られた 7 標本に基づき日本初記録として報告された (渋川ほか, 2007). 奄美大島からオーストラリアの西部太平洋に分布. 標準体長 28.9 mm と 32.9 mm の 2 個体が奄美大島の水深 4-6 m から採集された (渋川ほか, 2007). 標準和名カクシヤツトゲテンジクダイは, 本種の特徴である「皮下に埋没した痕跡的な第 1 背鰭第 8 棘」に由来する (渋川ほか, 2007).



図 8. マテアジ. KAUM-I. 974, 標準体長 179.7 mm, 鹿児島県南さつま市笠沙 (写真: 鹿児島大学総合研究博物館撮影・提供).

マテアジ (図 8)

Atule mate (Cuvier, 1833)

スズキ目アジ科マテアジ属

マテアジはこれまで日本から 3 個体 (三重県津市, 八重山諸島, 鹿児島県南さつま市) のみが報告されており, 日本ではきわめて稀な種であると考えられていた. しかし, 2006 年 10 月 14 日から約 1 ヶ月の間に 14 個体のマテアジが笠沙沖で採集された (伊東ほか, 2007). これらの個体は黒潮によって台湾から流されてきたものと考えられる. したがって, 本種の鹿児島県における出現は年毎に異なる黒潮の流路と流量に影響される可能性が高い. 伊東ほか (2007) は, 本種の胸鰭の長さと同側の横帯数の変異について若干の考察を行い, マテアジに同定されるものには 2 種が含まれている可能性が高いことを示唆した.



図 9. イトウオニヒラアジ. KAUM-I. 1098, 標準体長 233.0 mm, 鹿児島県南さつま市笠沙 (写真: 鹿児島大学総合研究博物館撮影・提供).

イトウオニヒラアジ (図 9)

Caranx heberi (Bennett, 1830)

スズキ目アジ科ギンガメアジ属

Caranx heberi は, これまで西太平洋域において南半球のみから報告されていたが, 鹿児島県南

さつま市笠沙町沖から2個体が採集された (Motomura et al., 2007c). これら2標本は北半球からの本種の初記録となった. 本種はオニヒラアジと形態的に似ていること, および採集者の伊東正英氏にもとづき, イトウオニヒラアジと名付けられた (Motomura et al., 2007c). 本種は成長すると全長 85 cm に達するが (Smith-Vaniz, 1999), 鹿児島県で採集された個体は全長 30 cm 以下の若魚であった.



図 10. ヒシカイワリ. KAUM-I. 1120, 標準体長 187.5 mm, 鹿児島県南さつま市笠沙 (写真: 鹿児島大学総合研究博物館撮影・提供).

ヒシカイワリ (図 10)

Ulua mentalis (Cuvier, 1833)

スズキ目アジ科ヒシカイワリ属

Ulua mentalis は, これまで台湾以南の熱帯域からのみ報告されていた. Motomura et al. (2007c) は, 鹿児島県笠沙沖から採集された本種 9 個体を日本からの初記録として報告した. 台湾産の *U. mentalis* に対してウルアアジとヒシカイワリの 2 つの和名が提唱されていたが, Motomura et al. (2007c) は後者を *U. mentalis* の標準和名と認め, *Ulua* 属の和名をヒシカイワリ属とした.

セダカダイミヨウサギ (図 11)

Gerres akazakii Iwatsuki et al., 2007

スズキ目クロサギ科クロサギ属

本種はこれまでダイミヨウサギ *Gerres japonicus* Bleeker, 1854 と同定されていた (Iwatsuki et al., 2007b). セダカダイミヨウサギはダイミヨウサギ



図 11. セダカダイミヨウサギ. MUFS 9584, 標準体長 135 mm, 宮崎県南郷町 (写真: 岩槻幸雄氏撮影・提供).

と比較して, 体高がやや高いこと, 有孔側線鱗数がやや少ないこと, 上顎後端の形などで異なるが, 野外での同定は難しい (標本が必要). セダカダイミヨウサギは, 鹿児島県内では標本に基づいて種子島からのみ報告されたが, 屋久島, 鹿児島湾, 大隅半島東岸にも分布すると思われる. 最大標準体長は 169 mm (Iwatsuki et al., 2007b). 沿岸性魚類の生物地理パターンから判断すると, 本種が黒潮の横断するトカラ以南に生息する可能性はない. 一方, ダイミヨウサギは冬期に水温が 16 度以下になる海域に生息しており, 九州での南限は長崎と大分の両県である (Iwatsuki et al., 2007b). ダイミヨウサギは鹿児島県には分布しないと考えられる. セダカダイミヨウサギは神奈川県から鹿児島県の太平洋側黒潮流域に分布する日本固有種.



図 12. クロサギ. KAUM-I. 5508, 標準体長 143.9 mm, 鹿児島市永田川河口 (写真: 鹿児島大学総合研究博物館撮影・提供).

クロサギ (図 12)

Gerres equulus Temminck and Schlegel, 1844

スズキ目クロサギ科クロサギ属

Iqbal et al. (2007) は, 八代海から採集されたクロサギ 1081 個体を用い, 生殖腺の組織学的観察

により産卵期および成熟サイズの推定を行った。その結果、本種の生殖腺指数の最大値は7月に認められ、生殖腺指数および卵巣の成熟段階の季節的変動から産卵期は6月から9月の間であることが分かった。また、卵巣の成熟様式が非同期発達型であったことから、クロサギは多回産卵魚であると明らかになった。



図 13. シマクロサギ. MUFS 11287, 標準体長 103 mm, 西表島 (写真: 岩槻幸雄氏撮影・提供).

シマクロサギ (図 13)

Gerres shima Iwatsuki et al., 2007

スズキ目クロサギ科クロサギ属

シマクロサギは背鰭棘数が普通9本であることから、10本の類似種とは容易に識別される (Iwatsuki et al., 2007b). 標準和名シマクロサギは、本種の体側にうっすらとある横縞に由来する。最大標準体長は 151 mm (Iwatsuki et al., 2007b). 琉球列島からインドネシアに分布。鹿児島県では、奄美大島から 11 個体が報告された (Iwatsuki et al., 2007b). 種子島・屋久島以北には生息しない。



図 14. ヤクシマキツネウオ. KAUM-I. 285, 標準体長 158.5 mm, 屋久島 (写真: 鹿児島大学総合研究博物館撮影・提供).

ヤクシマキツネウオ (図 14)

Pentapodus aureofasciatus Russell, 2001

スズキ目イトヨリダイ科キツネウオ属

鹿児島県屋久島沖で水中観察された *Pentapodus*

aureofasciatus の成長に伴う劇的な色彩の変化が明らかになった。Motomura and Harazaki (2007) は、本種に近縁なキツネウオの色彩変化も明らかにし、両種の比較を行った。本種は地域によって形態的・色彩の変異がみられることから、*P. aureofasciatus* とされているものには複数種が混ざっている可能性が示唆された。屋久島周辺は本種の最北端に位置する大規模な繁殖地である可能性が高いことから、屋久島に因み標準和名ヤクシマキツネウオが提唱された。



図 15. キビレアカレンコ. NSMT-P 57150, 標準体長 269 mm, 沖縄島 (写真: 岩槻幸雄氏撮影・提供).

キビレアカレンコ (図 15)

Dentex abei Iwatsuki et al., 2007

スズキ目タイ科キダイ属

キビレアカレンコは長い間、未記載種 *Dentex* sp. とされてきたが、2007年3月に新種 *D. abei* として記載された (Iwatsuki et al., 2007a). 本種は琉球列島、台湾、小笠原諸島、フィリピンに分布する (Iwatsuki et al., 2007a). Iwatsuki et al. (2007a) は、本種を鹿児島県からは報告していないが、奄美大島以南には生息すると思われる。通常水深 50–150 m 付近の生息する (Iwatsuki et al., 2007a).

キダイ (図 16)

Dentex hypselosomus Bleeker, 1854

スズキ目タイ科キダイ属

キダイの学名はこれまで *Dentex tumifrons* (Temminck and Schlegel, 1843) とされてきたが、*D. tumifrons* のタイプ標本はチダイであったため、*D. hypselosomus* が有効名となった (Iwatsuki et al., 2007a). 本種は東アジアの固有種で、南日本から韓国南部、中国、台湾に分布する。琉球列島と小



図 16. キダイ. KAUM-I. 6421, 標準体長 197.5 mm, 鹿児島県市来串木野市 (写真: 鹿児島大学総合研究博物館撮影・提供).

笠原諸島からの記録はない (Iwatsuki et al., 2007a). 鹿児島県内では, 県本土と種子島・屋久島には分布するが, 奄美大島以南には生息しないと思われる.



図 17. チダイ. KAUM-I. 6859, 標準体長 167.3 mm, 鹿児島湾 (写真: 鹿児島大学総合研究博物館撮影・提供).

チダイ (図 17)

Eynnys tumifrons (Temminck and Schlegel, 1843)

スズキ目タイ科チダイ属

チダイの学名はこれまで *Eynnys japonica* Tanaka, 1931 とされてきたが, *E. tumifrons* が *E. japonica* のシニアシノニム (古参同物異名) であることが分かった (Iwatsuki et al., 2007a). 本種は北海道から東シナ海の日本各地と韓国南部から中国, 台湾に分布するが, 琉球列島と小笠原諸島からの記録はない (Iwatsuki et al., 2007a). 鹿児島県内では, 県本土と種子島・屋久島には分布するが, 奄美大島以南には生息しないと思われる.



図 18. マダイ. KAUM-I. 4633, 標準体長 213.1 mm, 鹿児島湾 (写真: 鹿児島大学総合研究博物館撮影・提供).

マダイ (図 18)

Pagrus major (Temminck and Schlegel, 1843)

スズキ目タイ科マダイ属

鹿児島湾におけるマダイの放流効果調査データに基づき, 1989 年から 2004 年放流群の回収状況が評価された. その結果, 放流サイズの小型化や海面生簀における中間育成の中止等の影響によって, 放流魚の回収率と混獲率は近年低下してきていると推定された (穴道・北田, 2007).



図 19. ミナミコノシロ. KAUM-I. 956, 標準体長 420.4 mm, 鹿児島県南さつま市笠沙 (写真: 鹿児島大学総合研究博物館撮影・提供).

ミナミコノシロ (図 19)

Eleutheronema rhadinum (Jordan and Evermann, 1902)

スズキ目ツバメコノシロ科ミナミコノシロ属

ミナミコノシロはベトナム北部から台湾および中国沿岸に生息する東アジアの固有種である. これまで日本からは青森県から 1 個体が報告されているにすぎなかったが, 本種の日本から二番目の個体が 2006 年 10 月 28 日に鹿児島県南さつま市笠沙町沖の水深 27 m に設置した定置網で漁獲された. Motomura et al. (2007b) は, この標本を詳細に記載し, 本種の分布特性について考察した.



図 20. オグロトラギス. 屋久島 (写真:原崎 森氏撮影・提供).

オグロトラギス (図 20)

Parapercis pacifica Imamura and Yoshino, 2007

スズキ目トラギス科トラギス属

オグロトラギスの学名はこれまで *Parapercis polyptalma* (Cuvier, 1829) とされてきたが (例えば Shimada, 2002), *P. polyptalma* はインド洋に分布する *P. hexoptalma* (Cuvier, 1829) のジュニアシノニム (新参同物異名) であり, オグロトラギスは 2007 年 3 月に新種として記載された (Imamura and Yoshino, 2007). 最大標準体長は 185.8 mm (Imamura and Yoshino, 2007). 日本からインドネシアの西部太平洋に分布. 日本国内では, 四国から琉球列島に生息し (Imamura and Yoshino, 2007), 鹿児島県内の沿岸域でも普通にみられる.



図 21. マダラギンボ. 鹿児島湾 (写真:出羽慎一氏撮影・提供).

マダラギンボ (図 21)

Laiphognathus longispinis Murase, 2007

スズキ目イソギンボ科

マダラギンボの学名はこれまで *Laiphognathus multimaculatus* (Smith, 1955) とされてきたが, *L. multimaculatus* は台湾以南の西太平洋とインド洋に分布する種であり, 日本産のマダラギンボは新種 *L. longispinis* として記載された (Murase, 2007). 最大標準体長は 51.2 mm (Murase, 2007). マダラギンボは東アジアの固有種. 鹿児島県では, 鹿児島湾から報告されている.



図 22. ノコギリホシハゼ. NSMT-P. 73127, 標準体長 23.3 mm, 西表島 (写真:鈴木寿之氏撮影・提供).

ノコギリホシハゼ (図 22)

Asterropteryx senoui Shibukawa and Suzuki, 2007

スズキ目ハゼ科ホシハゼ属

鈴木・渋川 (2004) の「ホシハゼ属の 1 種 -2 *Asterropteryx* sp. 2」が新種として記載され, 新標準和名ノコギリホシハゼが提唱された. 西表島から採集された個体のみに基づいて記載されたが, Shibukawa and Suzuki (2007) は, 本種が石垣島と奄美大島にも生息すると付記している. 種子島・屋久島以北に分布する可能性は低い. 最大標準体長は 24.9 mm (Shibukawa and Suzuki, 2007). 水深 15-50 m の砂泥底に生息する (鈴木・渋川, 2004).



図 23. オオメチヒロハゼ. NSMT-P. 73002, 標準体長 25.5 mm, 奄美大島 (写真:渋川浩一氏撮影・提供).

オオメチヒロハゼ (図 23)

Obliquogobius megalops Shibukawa and Aonuma, 2007

スズキ目ハゼ科チヒロハゼ属

奄美大島沖の水深 290 m の海底から採集された 1 標本 (標準体長 25.5 mm) に基づいて新種記載された (Shibukawa and Aonuma, 2007). 学名, 標準和名ともに本種の眼が大きいことに由来する.



図 24. ヒメアオギハゼ. NSMT-P. 49335, 標準体長 17 mm, 石垣島 (写真:松浦啓一氏撮影・提供).

ヒメアオギハゼ (図 24)

Trimma flavatrum Hagiwara and Winterbottom, 2007

スズキ目ハゼ科ベニハゼ属

鈴木・渋川 (2004) の「ベニハゼ属の 1 種-10 *Trimma* sp. 10」が新種として記載され、新標準和名ヒメアオギハゼが提唱された。学名 *flavatrum* は本種の色彩に由来する (*flavus*=黄色, *atrum*=黒)。本種は奄美大島以南の西部太平洋に広く分布する (Hagiwara and Winterbottom, 2007)。タイプ産地は奄美大島。最大標準体長は 23.0 mm (Hagiwara and Winterbottom, 2007)。水深 5-20 m 付近をホバリングしている (鈴木・渋川, 2004)。



図 25. エリホシベニハゼ. KPM-NI 5731, 標準体長 18.5 mm, 西表島 (写真: 瀬能 宏氏撮影・神奈川県立生命の星・地球博物館提供)。

エリホシベニハゼ (図 25)

Trimma hayashii Hagiwara and Winterbottom, 2007

スズキ目ハゼ科ベニハゼ属

鈴木・渋川 (2004) の「ベニハゼ属の 1 種-4 *Trimma* sp. 4」が新種として記載され、新標準和名エリホシベニハゼが提唱された。標準和名は、本種の鰓条骨膜上にある 1 対の黒斑に由来するものと思われる。最大標準体長は 25.8 mm (Hagiwara and Winterbottom, 2007)。本種は奄美大島以南の西部太平洋に広く分布する (Hagiwara and Winterbottom, 2007)。サンゴの下に生息し、窪みの天井に逆さになって静止していることも多い。



図 26. オキナワベニハゼ. KAUM-I. 7209, 標準体長 24.0 mm, 鹿児島県南さつま市坊津 (写真: 鹿児島大学総合研究博物館撮影・提供)。

オキナワベニハゼ (図 26)

Trimma okinawae (Aoyagi, 1949)

スズキ目ハゼ科ベニハゼ属

Manabe et al. (2007a, b) は鹿児島県南さつま市赤水の岩礁でオキナワベニハゼの繁殖生態を潜水観察した。本種は一夫多妻の婚姻形態を有するが、繁殖価を高めるために雌雄がグループ間を移動して双方向の性転換を行い、グループ間を移動する雌は体サイズによる社会的順位を上げることで、優位雄へと性転換する可能性を高めることが明らかになった。



図 27. オニベニハゼ. KPM-NI 3444, 標準体長 33.0 mm, 伊豆海洋公園 (写真: 瀬能 宏氏撮影・神奈川県立生命の星・地球博物館提供)。

オニベニハゼ (図 27)

Trimma yanagitai Suzuki and Senou, 2007

スズキ目ハゼ科ベニハゼ属

鈴木・渋川 (2004) の「ベニハゼ属の 1 種-11 *Trimma* sp. 11」が新種として記載され、新標準和名オニベニハゼが提唱された。最大標準体長は 36.8 mm で、ベニハゼ属で最大 (Suzuki and Senou, 2007)。本種は静岡県から琉球列島に分布する (Suzuki and Senou, 2007)。鹿児島県内では、鹿児島湾から標本に基づいて報告された。

■ 補遺

以下の 10 種も 2007 年に報告されたが、本報告と同様な (より詳しいが) 記述が鹿児島大学総合研究博物館 Newsletter No. 16 (2007 年 3 月 20 日発行) に掲載されているため、ここでは補遺として簡単に紹介するとどめる。なお、鹿児島大学総合研究博物館 Newsletter は、次の URL からダウンロードが可能である (<http://www.museum.kagoshima-u.ac.jp/publications/publications.html>)。写真はすべて鹿児島大学総合研究博物館撮影・提供。



図 28. カタボシイワシ. KAUM-I. 888, 標準体長 236.3 mm, 南さつま市笠沙. ■本種の世界最大個体.



図 29. オグロイワシ. KAUM-I. 1477, 標準体長 75.4 mm, 鹿児島県肝属町内之浦. ■鹿児島県初記録.



図 30. テングノオトシゴ. KAUM-I. 420, 標準体長 60.3 mm, 鹿児島県肝属町内之浦. ■鹿児島県初記録.



図 31. タウナギ. KAUM-I. 1095, 全長 423.1 mm, 鹿児島市神之川水系. ■鹿児島県本土初記録.



図 32. クサウオ. KAUM-I. 1078, 標準体長 404.9 mm, 鹿児島県獅子島沖. ■鹿児島県初記録・九州南限記録.



図 33. スミツキアトヒキテンジクダイ. KAUM-I. 1491, 標準体長 49.7 mm, 鹿児島県肝属町内之浦. ■鹿児島県初記録.

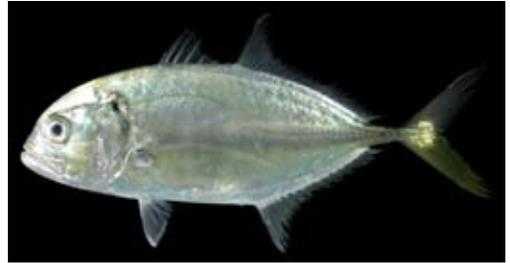


図 34. ミナミギンガメアジ. KAUM-I. 1099, 標準体長 184.8 mm, 南さつま市笠沙. ■鹿児島県初記録.



図 35. イサキ. KAUM-I. 1263, 標準体長 201.9 mm, 南さつま市笠沙. ■色彩変異.



図 36. ナミダフグ. KAUM-I. 162, 標準体長 81.4 mm, 南さつま市笠沙. ■鹿児島県初記録・北限記録.



図 37. クサビフグ. KAUM-I. 393, 標準体長 274.0 mm, 南さつま市笠沙. ■鹿児島県初記録.

■ 謝辞

画像と文献を提供して下さった、渋川浩一、岩槻幸雄、瀬能 宏、木村清志、鈴木寿之、松浦啓一、原崎 森、出羽慎一、大富 潤、真鍋尚也、中江雅典に感謝する（敬称略）。

■ 引用文献

Hagiwara, K. and R. Winterbottom. 2007. Two new species of

- Trimma* (Gobiidae) from the western Pacific. Bull. Natl. Mus. Nat. Sci., Ser. A, (Suppl. 1): 163–174.
- Imamura, H. and T. Yoshino. 2007. Three new species of the genus *Parapercis* from the western Pacific, with redescription of *Parapercis hexophthalma* (Perciformes: Pinguidae). Bull. Natl. Mus. Nat. Sci., Ser. A, (Suppl. 1): 81–100.
- 伊東正英・高山真由美・原口百合子・松沼瑞樹・本村浩之. 2007. 鹿児島県から多獲されたアジ科の稀種マテアジ. 南紀生物, 49 (2): 117–118.
- Iqbal, K. M., J. Ohtomi and H. Suzuki. 2007. Reproductive biology of the Japanese silver-biddy, *Gerres equulus*, in western Kyushu, Japan. Fish. Res., 83: 145–150.
- Iwatsuki, Y., M. Akazaki and N. Yaniguchi. 2007a. Review of the species of the genus *Dentex* (Perciformes: Sparidae) in the western Pacific defined as the *D. hypselomus* complex with the description of a new species, *Dentex abei* and a redescription of *Evynnis tumifrons*. Bull. Natl. Mus. Nat. Sci., Ser. A, (Suppl. 1): 29–49.
- Iwatsuki, Y., S. Kimura and T. Yoshino. 2007b. A review of the *Gerres subfasciatus* complex from the Indo-West Pacific, with three new species (Perciformes: Gerreidae). Ichthyol. Res., 54 (2): 168–185.
- Kimura, S., D. Golani, Y. Iwatsuki, M. Tabuchi and Y. Yoshino. 2007. Redescriptions of the Indo-Pacific atherinid fishes *Atherinomorus forskalii*, *Atherinomorus lacunosus*, and *Atherinomorus pinguis*. Ichthyol. Res., 54 (2): 145–159.
- 木村清志・岩槻幸雄・吉野哲夫. 2007. トウゴロウイワシ科ヤクシマイワシ属 *Atherinomorus lacunosus* と *Atherinomorus pinguis* の標準和名. 魚類学雑誌, 54 (1): 91–92.
- Manabe, H., M. Ishimura, A. Shinomiya and T. Sunobe. 2007a. Inter-group movement of female of the polygynous gobiid fish *Trimma okinawae* in relation to timing of protogynous sex change. J. Ethol., 25: 133–137.
- Manabe, H., M. Ishimura, A. Shinomiya and T. Sunobe. 2007b. Field evidence for bi-directional sex change in the polygynous gobiid fish *Trimma okinawae*. J. Fish Biol., 70: 600–609.
- 松沼瑞樹・米沢俊彦・四宮明彦・鈴木廣志・大木公彦・本村浩之. 2007. 絶滅危惧種スナヤツメ南方型の鹿児島県からの70年ぶりの記録. 日本生物地理学会会報, 62: 23–28.
- Motomura, H. and S. Harazaki. 2007. *In situ* ontogenetic color changes of *Pentapodus aureofasciatus* (Perciformes, Nemipteridae) off Yakushima Island, southern Japan and comments on the biology of the species. Biogeography, 9: 23–30.
- Motomura, H., M. Ito, H. Ikeda, H. Endo, M. Matsunuma and K. Hatooka. 2007a. Review of Japanese records of a grouper, *Epinephelus amblycephalus* (Perciformes, Serranidae), with new specimens from Kagoshima and Wakayama. Biogeography, 9: 49–56.
- Motomura, H., M. Ito, M. Takayama, Y. Haraguchi and M. Matsunuma. 2007b. Second Japanese record of a threadfin, *Eleutheronema rhadinum* (Perciformes, Polynemidae), with distributional implications. Biogeography, 9: 7–11.
- Motomura, H., S. Kimura and Y. Haraguchi. 2007c. Two carangid fishes (Actinopterygii: Perciformes), *Caranx heberi* and *Ulua mentalis*, from Kagoshima: the first records from Japan and northernmost records for the species. Spec. Div., 12 (4): 223–235.
- Murase, A. 2007. A new species of the blennioid fish, *Laiphognathus longispinis* (Perciformes: Blenniidae), from southern Japan and Taiwan. Ichthyol. Res., 54 (3): 287–296.
- Nakabo, T. (ed.) 2002. Fishes of Japan with pictorial keys to the species. Tokai Univ. Press, Tokyo. 1749 pp.
- Nelson, J. S. 2006. Fishes of the world. Fourth ed. John Wiley & Sons, Inc., New Jersey. xv + 601 pp.
- 小川一男. 1937. 地理的分布から観た鹿児島県の淡水魚. 広島県博物学会誌, (5): 11–27.
- 櫻井 真. 2007. ハオコゼ *Hypodytes rubripinnis* の繁殖生態. 地域・人間・科学, (10・11): 29–47.
- Shibukawa, K. and Y. Aonuma. 2007. Three new species of the deep-dwelling goby genus *Obliquogobius* (Perciformes: Gobiidae: Gobiinae) from Japan, with comments on the limits of the genus. Bull. Natl. Mus. Nat. Sci., Ser. A, (Suppl. 1): 137–152.
- Shibukawa, K. and T. Suzuki. 2007. Two new species of the cheek-spine goby genus *Asterropteryx* (Perciformes: Gobiidae: Gobiinae) from the western Pacific. Bull. Natl. Mus. Nat. Sci., Ser. A, (Suppl. 1): 109–121.
- Shibukawa, K., Y. Takata and G. Shinohara. 2007. First record of a rare moray, *Enchelycore kamara* (Actinopterygii: Anguilliformes: Muraenidae), from Amami-oshima Island, Ryukyu Islands, Japan. Spec. Div., 12 (3): 187–192.
- 渋川浩一・高田陽子・篠原現人. 2007. 奄美大島より得られた日本初記録のテンジクダイ科カクシヤットゲテンジクダイ (新称). 魚類学雑誌, 54 (2): 219–223.
- 六道弘敏・北田 修一. 2007. 鹿児島湾におけるマダイの種苗放流効果. 日本水産学会誌, 73: 270–277.
- Smith-Vaniz, W. F. 1999. Carangidae, pp. 2659–2756. In K. E. Carpenter and V. H. Niem (eds.). FAO species identification guide for fishery purposes. The living marine resources of the western central Pacific. Vol. 4. Bony fishes part 2 (Mugilidae to Carangidae). FAO, Rome.
- Suzuki, T. and H. Senou. 2007. Two new species of the gobiid fish genus *Trimma* (Perciformes: Gobioidae) from southern Japan. Bull. Natl. Mus. Nat. Sci., Ser. A, (Suppl. 1): 175–184.
- 鈴木寿之・渋川浩一. 2004. 決定版日本のハゼ. 瀬能宏 (監修). 平凡社, 東京. 536 pp.
- 高橋香緒里・真鍋尚也・櫻井 真・四宮明彦・須之部友基. 2007. 薩摩半島南部沿岸海域で捕獲されたキビナゴの雌雄同体個体. 魚類学雑誌, 54 (2): 246–247.